

ふくしでひろがる ありのままでいられる場所

「ふくし」は、ふだんのくらしのしあわせともいわれている。社会福祉施設は、高齢者・障がい者・児童などサポートを必要とする人びとのくらしを支え、「地域で誰もがありのままでいられる場所」をつくりだしている。今回は、2つの実践を紹介する。

「遊育園」は、働く親と子どものセーフティネットの役割も担う。医療と福祉の連携により発達障がい児のケアなど、きめこまやかな支援ができ、地域の課題も見えてくる。

さらなる挑戦、未来のために

今、力を入れている事業のひとつ

「発達応援カレッジ遊育園」では、自立した生活を送ることに困難を抱える18歳以上の方を対象に、就労に向けた訓練を行う。高校卒業時の能力で就労先を決めるのではなく、「コミュニケーション力など働く力を総合的に育むことで、自己実現をサポートしている。

リーダーの西川透太さんは、「利用者の希望や就労の意欲を引き出せたとき、大きなやりがいを感じる」と語る。



西川 透太さん

Q&A あなたのBe Real



新たなチャレンジをつづける桃林会。気になることを、副理事長の園田裕紹さんに聞いてみた。

Q 事業を企画するうえで大事なことは？

A 福祉の世界では、目の前のことに素直に向きあうことで人やモノ、思いがつながりカタチになる。事業も多くの人が意見を出しあうことで実現できる。

Q いま、思うことは？

A 新たな福祉の仕組みを作って、こどもの時期の機会格差を少しでも解消したい。

Q いま、高校生に伝えたいこと

A 今、やりたいことがなくても、自分のことを肯定的に振り返ること、周りの人を大切にすることで、見えてくる。福祉は挑戦できる場を与えてくれ、自分の可能性もひろげてくれる。

園田 裕紹さん

「遊び」×「学び」

社会福祉法人 桃林会(摂津市)



保護者が利用する併設のランドリーカフェは、地域交流の拠点であり、障がい者の活躍の場でもある

連携し、ひろがる可能性

市内初の認定こども園と併設する



医療と福祉の連携は、利用者や職員の安心につながる

結び目

四恩学園では、0歳から100歳までの地域共生の結び目となるため、乳児院や特別養護老人ホームなどの施設運営だけでなく、人と場所の力を生かした居場所づくりに取り組んでいる。

居場所づくりのキーワードは「コラボ」。企業、NPO、地域の商店

コラボが地域をデザインする

桃山学院大学ソーシャルデザイン学科に所属する学生で組織されたFIORE(フィオレイ)もコラボしている団体のひとつだ。

「コロナ下でもつながりつづけたい」。学生と法人の思いがひとつになり、新たな取り組みが生まれた。

VRであの場所へ

ひとつは「シエタビ」。施設に入居している高齢者の思い出の場所に学生が訪れ、撮影・編集した動画をVRで見ることによって当時性を再現する。



VRで模擬外出を体験する高齢者

学生の複数回にわたるていねいな聞き取りと工夫をこらした映像かけがえのない時間を過ごした場所への旅に高齢者は涙する。

まさに「ごちゃまぜ」

もつつのプロジェクトは「コミュニティカフェ」通称「ごちゃまぜ食堂」だ。誰もが気軽に交流できる場として学生が企画・発信し、開催している。

取材当日はFIORE(フィオレイ)夏祭り。施設で準備した200食の無料のカレーはすぐになくなるなど多くの人でにぎわう。かき氷やヨーヨー釣りなど、地域のひとと施設の子どもたちが楽しんだ。



FIOREのメンバー、小さい写真は佐藤さんとゼミを指導する南友二郎先生

シェアから広がる可能性

「大切に行っていることは楽しむ、自分のためにやる、失敗を恐れな」と語るのは、FIORE代表の佐藤舜さん(4年生)。卒業後も、地域の活動の後輩に引き継いでいきたいと考えている。

「学生の発想や活動が職員に気づきを、利用者には元気を与えている」とふりかえるのは、法人事務局長の西田和人さん。分野も世代も超えたコラボがまちの可能性をひろげている。



西田 和人さん

「多世代」×「居場所」

社会福祉法人 四恩学園(大阪市)



Instagramで発信し、毎回大盛況 コミュニティカフェ「ごちゃまぜ食堂」



FIORE(フィオレイ) 夏祭り